

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079

振替 東京0-58431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

思想闘争のすすめ(二) 2

「自壊の道」をさらに加速 3

——総評第七二回大会報告——

新たな段階に入った中米情勢(一) 8

「ヤルしかない!」の必然性(一) 13

——日常闘争に工夫をつくせ——

広島を忘れるな! 17

岩下武夫著(社会通信社刊)

「ソ連脅威論」の虚構

好評発売中 / B6版 二百頁 定価千円(送料二百円)

旬刊社会通信

NO. 240

一九八四年九月一日

一九八四年九月一日

(毎月一日・二日・三日三回発行)

■巻頭言■

思想闘争のすすめ(二)

マルクス主義は旧くなったとの主張が、社会党の学者グループから大合唱されている。彼らの主張は次のようなものである。

「既存の社会主義は、社会改革に幾多の歴史的役割を果たしたが、中央集権的計画経済と党と国家の一体化がいまや成長の鈍化をまねき、社会主義における民主主義の問題など幾多の矛盾に直面しており、その復権が求められている。」（『解説・新しい社会の創造』一〇頁）。

「われわれのめざすのは『唯一の前衛政党』ではなく、多元的な社会のなかでの政治的役割を創造的に果たしうる民主主義の党である。」（同、二四頁）。

こうした「発見」も前稿（本誌第二三九号）の槇枝先生の発見と同じく、不勉強な「マルクス主義」学者の所産にすぎない。独占資本と彼らのお雇い学者は、マルクス主義の成立と時を同じくして、マルクス主義批判のために、われらが「学者」先生と同じことをくり返し説教してきたからだ。教壇ではもちろんのこと、社内教育として。

新日鉄名古屋製鉄所教育部のテキスト『社会思想』は、「はじめに」でこう述べている。「マルクス主義は、成立間もない資本主義社会の弊害を取り上げて、それを体系化かつ普遍化し、高度に発展した資本主義社会には必ず労働者階級の革命が起こり、共産主義社会に変化すると説くものである。」

しかし、歴史はこのマルクスの予言どおりに展開せず、資本主義が最も未発達で封建的色彩が強い、ロシアと中共において革命が成功した。しかも、この両国においても、…：経済的にも依然として、我が国を含めた資本主義（西側）諸国より低位にあることは歴然としている。また、第二次世界大戦終了時、…：社会主義（共産主義）に移行した東欧諸国においても、…：自由化の動き…：等、政治的にも極めて不安定であり、経済的にも一九七八年のオイルショック以降、極度の赤字財政を続け、破綻寸前にまで悪化している国があると報道されている。いずれにしても、これら共産圏諸国においてマルクスやエンゲルスの描いた理想的な国家は実現されていないことは事実であろう」

この文章は一九七七年のものである。「新しい社会の創造」と瓜二つであることは明らかだ。もし、マルクスの主張が歴史の法則に反したものであるなら、こんな批判はまさに無用の長物だ。だが、彼らはマルクス主義者がマルクス主義を宣伝する幾千倍、幾万倍の金と時間をかけて、これをくり返す。洗脳に必死となる。その事実こそ、マルクス主義が歴史によって「否定」されてはいないことの何よりの証明だ。

活動家は社会主義政党の宝だ。だが、その活動家のクビを財政難を理由にはねる。他方、勉強などしたことのない、書物もろくに読んでもない独占たちの話を聞くために散財する。これが「ニュー社会党」だとすればまことに残念なことである。

現代は、本誌で再三再四指摘しているように、資本主義の危機の時代である。国家予算の二倍もの借金を抱えているのはほかならぬ日本政府だ。彼らの主張は、そのまま彼らに返されなければならぬ。

「自壊の道」をさらに加速

— 総評第七一回大会報告 —

残念な結果、だが心を新たに

総評は「自壊の道」をひた走っている。「自壊の道」から訣別し、「再生への道」に舵がとれるか。総評第七一回大会の焦点はここにあった。残念だが、大会は「自壊の道」に拍車をかけた。これが大会の結論だ。

心楽しい報告ではない。「自壊の道」にどう接近したかを分析しなければならないからだ。だが、この現実を避けてわれわれの運動はない。この「悲しく」「残念な」事態を糧にし成長すること、これが現在、われわれに課せられた階級的責務であるからだ。

総評再生の課題は三つ

「自壊の道」の克服、つまり総評「再生」の基本的課題は三つあった。第一に八四春闘総括と国民春闘再構築、第二に労戦「統一」、地域労働運動の再生、第三に反「行革」、反「合理化」闘争の路線の明確化である。

総評が新運動方針で強調した(1)時短、(2)反戦・平和のたたかい、(3)「ニュー社会党」の育成・強化、そして攻めの姿勢を示した「六百万総評」も、前者の論議が前進して実を結ぶ。

統一労組懇問題もそうである。統一労組懇も統一してはいない。総評が「自壊の道」を進めば進むほど、「独立派」は活気づく。「統一派」は小さくなる。

労働組合主義を示したブライト

大会にはDGB(ドイツ労働総同盟)委員長エルンスト・ブライトが出席、あいさつした。週三五時間を要求し、勝利したばかりの組合だ。DGBは階級的労働運動に立つ組合ではない。同盟やJICのように労資が「融合」した組合でもない。

彼はこう述べた。

「失業は今後もふえつつける。時間当りの生産性上昇が経済成長率の上昇よりも高いのがその原因」

「われわれは、経営者や政府によってお互いに競争させられるのを共同して防がなければならぬ」

「失業問題を避けられないものとしてあきらめないつもりならば、時間短縮を世界的な規模でおし進めることが必要」

あたり前の発言だ。「競争の排除」「労働者の不安の除去」こそ、労働組合の団結の基礎、最低の任務だ。「事業危機」論から、急速に「コペルニクスの転換」を辿りつつある総評への「警鐘」とも受けとめられよう。

「運動の転換期」と黒川議長

黒川議長あいさつは、行革による矛盾とその結果、自民党支持基盤に動揺が生まれつつ

あることを鋭く衝いた。だが、そこまでだった。

「時代は変わった。低成長、財政赤字、高齢化、ME革命には、従来の観念や考え方は対応不能。総評の労働運動とは何かを考え、追求する時期。運動の転換期」との従来の認識にもとづくものであったからだ。

運動方針案はもっとひどい。破綻が証明された四団体共闘、全民労協型春闘を肯定。労戦再編の促進を主張。キツパリ、主張されたのは統一労組懇への批判だけという有様だったからだ。

石橋氏よ、高い理想を忘れるな

大会には今年も共産党が招かれなかった。これはもう記事にもならなくなったことだ。竹入公明党委員長は、「公明党の考えと総評の方針の考えは同じ」と総評を賛美。さらに「社会党と石橋さんに期待」と、石橋社会党委員長のあいさつを称賛した。それもそのはず、石橋あいさつは従来になく「格調」高かったからだ。長くなるが議事録から引用する。

「さきの党大会におきましても、私は社会党支持のすそ野をどうして広げるかという視点をこれから以後のあらゆる論議、すべての行動に際しての基本に据えていきたいと申しました。反対や抵抗の闘いが重要であることはいうまでもありませんが、それだけでは必ずしも防衛に成功していないばかりか、じりじりと後退を余儀なくされているという現実を直視しての発言であります。少なくとも、仲間うちでしか通用しない言葉、理解されない行動から抜け出ない限りためであり、仲間うちだけの集会や演説会に終わっている限り、すそ野を広げることに必要ないということも指摘したのであります。

また、党員の行動力、エネルギーを生み出すためには、高い理想が必要であるが、同時に呼びかけられる側に立って考えてみれば、それ以上に魅力ある政策や現実処理能力の方が重視されているとも申しました。(略)

私といたしましては、理論、ましてや教条が、常に庶民の現実感覚や常識より優位にあるべきだといった思い上がりをもたず目下のところ、その一つ一つを克服することに全力をつくしているつもりであります。

『脱皮と再生』と簡単にいうことはできません、さて、それを実行しようとするとなると決して容易なことではございません。四〇年の歴史の中でつくり上げられたもの、しみついたものを改めるには、相当思い切った手法、発想の転換が必要なのであります。したがって、私は、改革には若干の行き過ぎは避けられないのだと覚悟してやっています。運動方針の中に、『国民意識に適合した政党への脱皮の努力を急ぐ社会党の動きを温かく見守り、野党の中心勢力としての力量を強化することを期待する』とありますが、認識の一致を喜ぶとともに、このような総評の温かい態度に心から感謝いたしたいと思います」

石橋氏は「反対や抵抗」「理論や教条」「高い理想」を肯定している。他方、「国民意識に適合」しないと切り捨てる。ところが、いま石橋氏のいう「国民意識」は表面的には、保守化傾向を強めている。中曽根首相との「非武装・中立」をめぐる論議は何であったのか。石橋氏が「理論」「高い理想」を失念しつつあることを心から憂うる。

右傾化の二つの要因

総評が「自壊の道」をひた走るのは、「抵抗、反対」「理論」「高い理想」を欠くからだ。労働者の高い自覚と本能に依拠し、「すそ野」をひろげようとはしない。こうして、活気も魅力も消えうせる。

さらに、総評は組織的にも分解している。分解の傾向は三つだ。第一は、全民労働協加盟第一次組合（鉄鋼労連、合化労連、全日通、電通労連、非鉄金属労連の五単産）だ。彼らは、総評の同盟・J・C化を意識的に推進している。第二は、統一労働組懇系四単産（医労協、運輸一般、建設一般全日自労、国公労連）だ。彼らは「総評に未来はない」「右転落の新たな段階」と、左から総評解体を促進する。第三は、公労協、公務員、民間中小、地県評だ。数の上では、彼らは前二者を圧倒している。だが、彼らの間にも「運動の進め方」に意見の相違、右傾化が顕著となり、分化傾向が見られる。党員協がまったく機能しない組合、真つ二つに割れている組合というように。

右と「左」の諸君はいいたい放題。他方、数のうえで圧倒的多数の主流派の諸君は、右への高い政治判断でものをいう。総評指導部は、それをいいことに右に舵をとる。総評が右へ右へと流れる背景だ。職場のシラケが指導部を上げます。

統一労働組懇批判で右傾化促進

今大会を前に、総評指導部への主流派内部の危惧はかつてなく高まっていた。「このままでは総評はなくなる。なんとかしなくては」と。私も幹部諸氏の悩みを耳にした。総評三顧問が呼びかけた「武藤国労委員長と懇談する会」（三顧問で出席したのは岩井氏）に多くの人びとが集まり、率直に意見が交換されたのは、その象徴だ。

ところが、総評指導部は宇佐美同盟会長の——
「全的統一について、官公労部門については、未だその条件は熟していない。統一の条件作りは総評官公労組織において、統一労働組懇との訣別が可能かどうかにかかっている」

との中評あいさつに符節を合わせるかのように、統一労働組懇批判にのりだした。同盟の新たなゆさぶり策動だ。これによって、同盟は失うものは何一つない。総評主流左派にはためらいが生まれる。「統一労働組懇と同じ」といわれることを回避する傾向が生まれるからだ。方針批判の鋭さは失われる。こうして総評の活気は消えていく。

良心派幹部の不勉強が最大の原因だ。不勉強は労研センターと統一労働組懇を「双生児」と映し出す。

総評は四つに分化傾向

大会の全体的傾向からみよう。

第一は、四分解の傾向がさらに鮮明となったことだ。総評のJ・C・同盟化をすすめる全労協第一次加盟単産は「集中決戦方針が基本」（全日通）、「好況業種が先行」（合化労連）といい、労戦でも「官公労も労戦統一の輪に入ることが必要」（全日通）、「官公労統

一のプロセスなど具体的目標をたてよ（電通労連）と、方針案に右から注文をつけた。統一労組懇系四単産は「総評方針は右転落の新たな段階」と左記の修正案を提出、統一労組懇のセンター化の方向をより強めた。

「(1)、春闘について 管理春闘を許す同盟路線のわく内ではしかない四団体共闘軸の春闘路線を改め、労働者の生活実態にもとづく積極的な賃上げ要求を基礎に、大衆のエネルギーを結集して闘う。と同時に軍事費削減、大企業の利益還元をきっかけ、国民春闘の再構築をはかる。

(2)、政治 総評はこれまでの反共、安保・自衛隊容認の社公合意路線を改め、革新の大義を堅持する。

(3)、労戦統一 総評は右翼再編と手を切り、三原則にもとづく労戦統一のため奮闘する。（以下略）」

これらの発言は予想すみのものだった。問題は、主流左派の発言だった。その主流左派にも二つの分化傾向があらわれた。

県評代表が八人発言したが、彼らは全民労協の地域組織づくりには深い危機感を表明。総評方針の確立を求めた。また、全民労協参加を拒否した中小民間単産も、さらにはいやいや参加した組合も、総評の主体性強化を強く求めた。

これにたいし、公労協、公務員組合の発言は、不安と苦悩にみちたものであったが、「総評方針をわれわれの手で変える」気迫を欠いていた。

こうして、総評主流左派に微妙な差が生まれはじめたことが、今大会の特徴となった。第二は、「自壊の道」に歯止めがかからなかったことだ。

真柄事務局長の答弁にはまったく説得力がなかった。右と統一労組懇には、賛成と反対の立場からキッパリ答弁。だが、民間中小、公労協・公務員組合の苦悩にはふれなかった。

春闘では「集中決戦」を肯定。そのうえに「官民統一行動は戦略的課題として中期的に追求」と、当面、官民の統一闘争は「放棄」する姿勢を示した。傍聴者をビックリ仰天させたのが、「三年にいったんくらいストライキするのが（労働組合の）原則」と述べたことだ。「ストライキはやりません」というより、この答弁の方がいい。しかし、「三年にいったん」とは、

労戦については、「全民労協の発足は全的統一の第一段階」「次は官公労問題にふみこむ必要」「全的統一は民・官・地域の三位一体で」「基本構想問題では五項目をふまえ統一的に対処」と、これまた核心にせまるものは何もなかった。現状をさらに右に舵とる内容だ。

これらの答弁の背後にある考え方は（現在は）運動の転換期」「従来の観念や考えただけでは対応できず」との認識による。

第三は、「ニュー社会党」には、電通労連以外どの組合も関説しなかったことだ。社公合意問題のときは違う状況だ。

私鉄が「総評解消」の発言

最後に今大会の特徴にふれる。

第一は、私鉄総連が全民労協第一次参加五単産に大きくすり寄ったことだ。田村書記長はこう発言した。

「私鉄も（春闘再構築問題で）連投がきくほど強くない」「総評はやがて発展的解消をしますと思いい切った方がよい」「二月の臨時大会はもうやめましょう」「一二月の中央委で新しいことを出す。お楽しみに」と。

第二は、鉄鋼労連が沈黙を守ったことだ。理由は二つ。第一は、総評の右傾化がつづき、鉄連の望む方向に動いていること。第二は、反行革の雰囲気が高まりつつある現在、油を注ぐ愚を避けたということだ。

第三は、どの組合も「合理化」「行革」による首切り攻撃に必死にたたかう様を語ったことだ。三七人全員解雇の大阪日々新聞（新聞労連）、六五八名が未就業の北炭夕張新鉱（炭労）、七九〇人クビ切りの函館ドック（全造船）、函館ドックへの支援要請（全道労協）、四国ドック・エタニットパイプ高松工場閉鎖（香川県評）、定員制で七万の組織人員中四万人がクビ切り（全日自労）、行革によるクビ切り攻撃には、全通、全電通を除くすべての公労協・公務員組合が言及した。

第三は、こうして、反「合理化」、反「行革」のたたかいをめぐって、代議員を巻き込んだはげしい論議が巻き起ったことだ。

新聞労連の代議員は、「資本主義的な合理化攻撃に反対して闘う基本姿勢があいまいでは、合理化攻撃に立ち向かえない。資本主義的合理化と対決して闘う構えが重要」と、総評が階級的労働運動の基本に立ちもどることを強く訴えた。これに反論したのが炭労、全国金属、「資本主義的合理化に反対するというような」抽象的な言葉で現代のME技術革新に対応ができない、「産業政策」と「企業内の労働者に対する技術革新協定、職場闘争、職場交渉で雇用を守る」ことが重要。産業構造の転換によって生ずる新しい質の労働者の組織化の方向を明確にするのが、ナショナルセンター・総評の雇用にかんする方針」と。同盟・JCと変わるところのない主張である。

この論争に公務員、公労協組合が参加して、「反国民的『行革』攻撃を阻止する共闘会議の結成に関する決議」が誕生していたら、総評大会の雰囲気もまた変わったものになったであろう。だが、公労協、公務員組合の発言は、分析と決意表明にとどまり、こうたまたかうこの方針を明示することはできなかった。

真柄事務局長が「対案をもって臨むのが新しい運動の時代」と答弁したことが、それを示す。榎枝氏流に言えば「参加」路線を追求します、との意志表示に他ならないからだ。

第四は、すでにみたことから明らかなように、原案への賛成意見は皆無であったことだ。

若干の前進面も

だからといって、前進面が皆無であったわけではない。「反国民『行革』攻撃を阻止する共闘会議の結成に関する決議」「全斗換招請に反対する特別決議」を採択した。他に、国労、動労もエールを交換した。しかし、労働運動の総路線が揺らいでいる今日、過大な評価は禁物だ。

(T)

新たな段階に入った中東情勢(一)

五年間で文盲率は一〇％に

ニカラグアのサンディニスタ政権は、七日一九日、革命五周年を迎えた。この五年間にニカラグアは大きく変わった。七〇％をこえていた文盲率は一〇％前後にまで減った。四万四千家族（協同組合二万五千家族、個人一万六千六百家族）が土地の主人公となった。医療施設の改善も進んでいる。一日百万ドルもの援助が湯水のように投ぜられている隣国ホンジュラスではいぜんとして文盲率が五〇％をこえ、六七％の人が食うや食わずの生活を強いられているにもかかわらずである。

ニカラグアのサンディニスタ政権は、たったの五年間でこれだけの成果をあげたのだ。しかも、アメリカの「戦宣布告なき戦争」のなかで。

二つの選挙を軸に

ニカラグアを中心とする中米情勢はいま新たな段階に入った。「北方の巨人」の頭領を決める選挙は一月六日。その二日前の一月四日、ニカラグアは革命後初めての選挙をおこなう。オルテガ議長はすでに大統領選への立候補を表明した。コンタドーラ・グループ（メキシコ、パナマ、コロンビア、ベネズエラで構成）の動きも活発になった。それ以上に、ホンジュラス、エルサルバドル、コスタリカ、グアテマラの国内矛盾が激化する兆しをみせている。

以下、今後の中米情勢がどう動くか、簡単に現在の特徴を考えてみよう。

階級闘争の主戦場

七〇年代、世界の階級闘争の主戦場はアメリカの見知らぬ国、インドシナだった。八〇年代、その舞台は「テキサス、マサチューセッツ間よりも短かい」中米・カリブ海諸国に移った。人口二三百万人、面積約一五万平方キロの「小さな」国、ニカラグアのFSLN（サンディノ民族解放戦線）、エルサルバドルの解放勢力FMLN（フアラブンド・マルチ民族解放戦線）のたたかいが、「北方の巨人」を追いつめ、アメリカからの「真の独立」をめざす雄叫びが、全ラテンアメリカ大陸へと拡大したからだ。

レーガンが、「中米におけるゲリラ勢力の目標は、パナマからメキシコにいたる地域全体を不安にさせることであり」「米国民の国家安全保障が中米で危機にさらされている。われわれはここで守ることができなければ、他でも勝てないだろう。わが国への信頼は崩れOAS（米州機構）の同盟関係は碎かれ、わが祖国の安全をも危機に陥れることになる」「中米・カリブ地域には、世界におけるわが国の信用がかかっている」とヒステリックにがりたて、ニカラグア、エルサルバドルに公然と軍事介入を開始した背景だ。

戦争は今、ゲリラ戦というより全面戦争の様相を呈し、ニカラグアは七九年の「建国」以来、最大の困難に直面している。だが皮肉なことに、レーガンの介入は、ニカラグアの

FSLNの士気を高揚させ、「祖国防衛戦争」のスローガンが全国民を一つに団結させている。

アメリカ中米政策研究団体、米・中米関係委員会の分析がそれを示す。

「ニカラグアの特徴は、内部の政治勢力の両極化、政府の軍事化だが、あらゆる人的、物質資源が軍事に回され、社会政策がストップの状況にもかかわらず、政権の内部団結はますます強くなっている。祖国防衛論が説得力をもち、サンディニスタ以外の勢力は組織も政策もない。反サンディニスタ勢力さえも反米では一致という状況になっている。」

あせるレーガン

今、レーガンはあせりにあせっている。第一、中米をめぐる客観情勢が大統領就任わずか三年間で一変してしまった。「フォークランド」戦争を契機に、「アメリカ離れ」が一挙に加速し、「ラテンアメリカのことはラテンアメリカが自ら考え、行動しよう」という意志と目的をもつ「コンタドローラ・グループ」が力をもちはじめたことだ。累積債務問題は、いつ第二の「フォークランド」に転化するかもわからない。第二、エルサルバドル、ホンジュラスで、アメリカによる大量の軍事援助と経済の軍事化が政府と軍の腐敗、墮落を招き、国民の疲弊をもたらし、内部からくずれようとしていることだ。第三、大統領選挙を目前に控え事態は悪化の一途をたどり、レーガンの中米政策批判が六〇%を超え、世界の世論はニカラグアを支持、アメリカの同盟国でもレーガンの政策をめぐる対立がはげしくなっていることだ。

他方、サンディニスタ政権はレーガンを揺さぶりはじめた。具体的にはこうである。昨年一〇月、「中米情勢の外交的解決」をめざすコンタドローラ・グループの和平提案を積極的に受け入れる意向を示した。同年十一月、レーガンが「介入の口実」にしようとしたキューバ人技術者たちの帰国措置がとられた。同年十二月、ホンジュラス国境の山岳地帯に住し、無知なゆえに反革命ゲリラ勢力FDN（ニカラグア民主勢力）に買収され、サンディニスタ政権と対立していたミスキート族への融和策が講じられた。八四年一月には、カトリック教会指導部との対話が始まり、二月、オルテガ議長はサンディニスタ没五〇周年の大集会で総選挙の実施を約束し、反革命運動従事者の帰国許可措置を延長した。

フォンセカ湾での触雷事件は、レーガンにとって大きな打撃となった。サンディニスタ政権は国際司法裁判所にレーガンを告発、一挙に外交攻勢を展開し、地位を高めた。

外交戦の背後

こうした状況下、中米情勢は猛烈なスピードで動きだした。五月と六月、外交戦が一挙に展開した。レーガンがヨリ巧妙に立ち回ろうと、「力の政策」を背後に、コンタドローラ・グループを媒介とする活発な外交戦を開始した。ことだ。

レーガンのネライは二つある。第一は、ニカラグアを外交的に封殺し、孤立させること。第二はニカラグア以上に深刻な事態に陥っているエルサルバドルの国家権力をたて直すことだ。ニカラグアは、レーガンの意図を承知のうえで、この外交戦に積極的に応じている。戦争は社会主義建設を困難にする以外どんな役割も果たさないものであるから。

具体的にはこうだ。「ニカラグア政府・軍は安定している。今、直接介入したのでは勝目はない。戦争は長引き国際的にも波及する。ニカラグアを疲弊させる従来の方策を継続、強化しながら、地域的解決の準備を整える努力をしよう。このためには、コンタドーラ・グループをアメリカの誘導に従うものに変質させる必要がある。」

エルサルバドルではこうだ。「ダヴィドソンという殺人者がエルサルバドルで我者顔にふるまう態度を改めさせなければならぬ。彼がFMLNの勢力拡大の元凶だ。そのためには、右も左も切れる国内体制をつくりだすことだ。ドアルテに「中道」を名乗らせ、彼を選挙に勝たせることだ。こうなれば、軍事援助も意のままに、やっかいな議会もごまかせる」と。こうして三月から五月、レーガンはエルサルバドルの大統領選挙にすべての力を注いだ。ドアルテがレーガンのもくろみどおり大統領に選ばれた。

外交戦の準備はこうして整えられ、中米情勢は新たな展開をみせる。グアテマラ選挙もこの一環だ。

(1) ニカラグア・コスタリカの間に協定

第一。五月一五日、ニカラグアとコスタリカが「緊張緩和と信頼強化」のための「協定」を結んだ。わが国と同様、「非武装中立」の憲法をもつコスタリカが、なぜニカラグアに敵対したのか。理由は二つあった。

第一は、八二年一月、レーガンがニカラグアの「封じ込め」をめざし、直接的軍事介入の条件をつくるため、反共軍事同盟「中米民主共同体」を結成したことだ。エルサルバドル、ホンジュラス、ベネズエラ、コロンビア、コスタリカの五ヶ国が構成国。レーガンのねらいはホンジュラスを「前進基地」にコスタリカを「後方基地」にすることだった。このもくろみは、レーガンの「恋人」と「番犬」が戦争をおっぱじめたことよって破綻した。「アメリカばなれ」は一挙に加速し、それまでアメリカ一辺倒であったコロンビア、ベネズエラは、メキシコ、パナマとともにコンタドーラ・グループを形成した。だが、レーガンはコスタリカに「後方基地」となることを脅迫しつづけた。

第二は、FSLNからの脱落者パストーラが、八三年、反革命ゲリラ組織ARRDE（民主革命連合）の頭目として、コスタリカ国境に姿を現わし、ニカラグア領内で遊撃戦を展開し始めたことだ。パストーラは「反米・反サンディスタ」の路線をとり、北部戦線の「親米・反サンディニスタ」のゲリラ組織FDNとは一線を画していた。ニカラグアを南北から挟撃したくてウズウズしていたレーガンが、パストーラに手を伸ばさないわけがない。こうして、両国の関係は八三年九月、コスタリカがニカラグアと国交を断絶するまでにいたった。

「協定」は、(1)国境周辺の問題などを監視、紛争を防止することを目的とした合同委員会の設置、(2)両国の通信、連絡の強化措置など、六項目を内容とする。この「協定」締結後、スペインを訪問したモンヘ・コスタリカ大統領が、マドリドでの記者会見で「コスタリカが反革命派の後方基地になるのはまっぴらごめん」「コンタドーラの活動が消えるとき、それは戦争だ」と強い調子で述べた。「(中米危機の)話し合い解決の可能性を示す歴史的な出来事」といわれるゆえんだ。

(2) デラマドリはコントラドーラを代表

第二。五月一六日、デラマドリ・メキシコ大統領が訪米、レーガンと会談し、累積債務問題でのおどしにかかわらず、レーガンにこう言明したことだ。

「この大陸のすべての国は、みずから決める主権を尊重し、いかなる介入主義的解決をも拒否することによって平和を回復し、戦争を避けなければならない」

レーガンの「全体主義国家の連合による介入」説を真向から批判し、「中米危機の真因は、諸国内部の社会的・経済矛盾のあらわれ」との認識を示した。この立場は、翌一六日の米議会での演説にも貫かれた。

(3) レーガンとドアルテ

第三。五月二一日、エルサルバドルの新大統領に決まったドアルテが訪米、レーガンと会談したことだ。この会議こそ、レーガンが待ち望んだものだった。その理由は二つがある。

第一は、ドアルテの「勝利」は、過去三年、グレナダの事件とともに唯一、彼を満足させる出来事だったからである。これによってレーガンは、議会で手を縛られることなく、FMLN攻撃の基礎をえた。エルサルバドルへの公然たる介入が可能になった。五月二三日から始まった軍事演習「グラナデロー」に、はじめてエルサルバドル軍が参加したこと、五月二四日に下院が上院につづき、エルサルバドル援助六二〇〇万ドルを承認したことは、それを示す。

第二は、ドアルテが「自分の役目は軍の規律を正すこと」と記者会見で語っていることだ。これは、レーガンにとってニカラグア以上に頭の痛い「政府と軍の壊滅状況」打開への唯一の道となる。これによって、要塞化されたホンジュラス、「協定」を結んだとはいえない民族解放闘争を嫌悪するコスタリカとともに、ニカラグアを包囲する態勢が整えられるからだ。

レーガンのこのもくろみが成功する可能性は少ない。第一に、エルサルバドルの大地主・資本家たちは、ドアルテよりも「反共・ファシスト」のARENA（民族主義共和国連合）をたよりにしているからだ。その首領ダビッドソンは選挙で四三％を獲得、「ドアルテの勝利はCIAの介入による」と、真正面から敵対する姿勢を示している。第二に、エルサルバドル国民がアメリカの介入にあきあきしている。第三に、FMLNが、ドアルテに「アメリカの介入の受け皿になるのか、それとも民族民主的解決の対話を受け入れるのか」と、五月二六日、はやくも攻勢に転じた。FMLNは全土の三分の一をその支配下においており、農民、教会、ドアルテの政党キリスト教民主党ですら、その下部組織はFMLNに合同している。

ドアルテはレーガンとの約束どおり、六月以降、史上最大の「赤狩り」を開始した。他方、FMLNは六月一日以降、「独裁政治のテロに反対するサポーター」と人民戦争の強化」キャンペーンを開始。経済的「管制高地」へのたたかいを強化し、六月二八日には中米で最大の規模の水力発電所を占拠した。これは、ドアルテ最初の敗北だ。

(4) パストーラの追放

第四。ニカラグア・コスタリカ国境監視委員会の発足（五月二六日）と軌を一にして、

五月三十一日、ARDEの頭目パストーラをコスタリカ政府が国境侵犯で逮捕。六月一日、ベネズエラに追放したことだ。これでコスタリカとニカラグア国境紛争の源が取り除かれたようにみえる。だがそうではない。

パストーラ逮捕・追放のきっかけは、五月三〇日、ARDEの総司令部が爆破された事件だ。このとき、パストーラはアメリカからの「独立宣言」をやろうとしていた。ARDEの内部が「親米」「反米」の二派に分裂していたからだ。パストーラ追放は、政治的には「反米」派の頭目が消されたこと、南北からニカラグアを挟撃する体制が整ったことを意味する。ARDEとFDNの「共闘」を阻害する要因が取り除かれたからだ。六月二八日、ARDEがパストーラの追放を決定し、両派が「共闘宣言」を発したことはそれを示す。

(5) オルテガとシュルツが会談

第五。六月一日、ドアルテの大統領就任式に出席した米国務長官シュルツが、シュラウデマン中米特使、モトレイ中米担当国務次官補を同行してニカラグアを訪問、オルテガ議長と会談したことだ。これは、レーガンの指示によるもので、今後、「二国間の見解の相違について分析・検討する会議」をもつことで同意した。米外交筋は、六月三日、ロンドンで「ニカラグアとの交渉は一週間以内を開始」との情報を流し、六月二五日、メキシコで会談がはじまった。

これまで一貫してアメリカとの「対話」を求めたのはニカラグアだった。レーガンはこれを拒否、経済制裁から政治的・軍事的制裁へと、介入を強めた。この傾向は今も少しも変わらない。第一に、ホンジュラスの「前進基地」化は以前にも増してスピードを速めている。五月中旬、議会に提出された「中米地域軍事建設計画書」は、(1)ホンジュラスに戦闘航空部隊を派遣すること、(2)ホンジュラスでの軍事演習を毎年二〇万ドルの予算で一九八八年までつづけること、(3)一九九九年のパナマ運河返還に備え、ホンジュラスを「米軍事作戦基地」にすることを明らかにしている。第二に、ニカラグア、エルサルバドルの解放勢力の封鎖作戦はいぜんとして拡大しつづけている。昨年三月からはじまった米・ホンジュラス合同軍事演習「アウスタラI」「アウスタラII」は、八四年四月、米・ホンジュラス・エルサルバドル・グアテマラ・パナマ五ヶ国参加を想定した「グラナデローI」に発展した。五月二三日、再開された「グラナデローI」には、はじめてエルサルバドル軍一、三〇〇が加わった。他方、フォンセカ湾、カリブ海でも空母三隻をふくむ艦戦群がこの演習と共同歩調をとっている。第三に、エルサルバドルへの援助が増大している。第四に、七月二五日、アメリカはホンジュラスとの合同軍事演習「レンピラ作戦」を開始した、等である。レーガンの得意技は、握手を求めながら蹴上げることだ。INF交渉、START交渉等みんなそうだ。

これを知っているFSLN全国指導部は五月一八日、「長期戦の準備」を国民に呼びかけた。その方策は権力の基盤たる農民改革を推進し、医療、教育などの生活手段の向上をはかり、政治イデオロギー闘争の強化をはかるというものだ。このように、ニカラグアはどんな事態にでも対応できる体制を整えながら、レーガンの「握手」に備えている。

七月一九日の革命五周年集会在まさにそれだ。マナグアの集会にはこれまで最高の一五万人が集まった。戦争下、しかも人口二三〇万余の国で。そこでは、「ノーバサラン(反革命を通すな)」「一人でも多くを前線へ」の唱和がつづいた。

「ヤルしかない！」の必然性(一)

— 日常闘争に工夫をつくせ —

「ヤミ・カラ」から「過員」、そしていま「婦休・出向・肩叩き」……と実質クビ切りが進み、その旋風が巻き起こっているとき、全国の国鉄労働者のなかに、もはや「ヤルしかない！」の合言葉が地下水のように拡がり浸透している。この「ヤルしかない！」の語韻からは、情勢無視のいささかハネ返り・小児病的な語弊を感じさせるが、いよいよ「アウトがない」「逃げ場がない」と言われる状況になって、この「ヤルしかない！」という吐露には、深いそして熟慮したものが感じられる。

「ヤル」とは、ピーク時の行動だけを意味しない。

- ☆ 日常の職場ニュースをマメに出し、
 - ☆ 学習を地道・粘り強く取り組み、
 - ☆ 「五人組」等組織づくりに取り組み、
 - ☆ 安全点検を継続し、
 - ☆ 要求を組織し、要求を提出する、
 - ☆ 機関会議開催を民主的に行い、
 - ☆ 大・中・小の諸集会を取り組み、皆にモノを言わせる、
 - ☆ 分会・班等の交流に取り組み、
 - ☆ サークル、レク活動を組織する（北陸は、今度の「文化祭典」の過程で九名復帰）
 - ☆ 国関労をはじめ、国鉄関連労組との交流共闘に取り組み、
 - ☆ 地区労を核に、地域の各労組と連携・共闘に取り組み、
 - ☆ 勤労国民への教宣と協力喚起
 - ☆ 政党への協力要請
 - ☆ 最終的には諸実力行使↓ストライキを
- まさに「ヤル」中味はヤマほどある。以上のことは組合としてやり続けなければならぬ諸課題である。よく考えてみると、情勢がきびしく闘えない……というセリフは、長期展望コミでいくと実態や真実を反映していないし、組織論・運動論からも正鵠を射ていない。

「過員」闘争を

もちろん当面突き当たっている課題、たとえば「過員」「婦休」等の実質クビ切り問題については、集中的・意識的に右の諸行動のなかに織り込んでいく。具体的には「要求」課題の――

- ① 団体要求
- ② 一方的業命、配転やめよ
- ③ 検修等で思想的教育やめよ、技術教育を
- ④ 過員センターの性格とは何か
- ⑤ 下請・外注の中止・延期

- ⑥ カット賃金の補償
 - ⑦ 国民要求を営業に導入
 - ⑧ 安全確保の要員
 - ⑨ 勤務・権利・労働条件の保障
 - ⑩ ローカル線廃止反対
 - ⑪ 「過員」解消まで「合理化」中止
- などを右の諸活動・運動・闘争のなかに具体的に活かしていく。先輩たちはよく教導してくれたものだ。「日常的職場(↓地域)活動」と。やはりそんなにいい手はない。世の中も変わっていない(どころか先哲の見通した通り「帰休」等を例示するまでもなく資本主義の矛盾はより深まりつつある)以上、労働運動の戦略・戦術も基本的に変える必要はなく、国労綱領や闘争史に基づいて「階級的労働運動」を取り組まなければならない。

チエ出としての活動

さらに本部も常に口にし、お互いにもやってきたし、確認できる課題として、職場・地域における「創意工夫」「チエある活動」「職場の要求と討論に基づく職場闘争」である。全国職場活動家交流会や地方機関紙・誌などから挙げてみるとつぎのような活動・運動も粘り強く取り組まれている。

- 役員会でも学習会でも二カ月に一回位、合宿をして意思統一を強める
- 事故で殺された仲間の命日に何らかの集会等を計画する
- 「ヒルめし会」や「夕めし会」で交流する
- 国鉄内各組合の、たとえば乗務員分会の交流を行う
- 処分された者の交流会を行う
- 安全に関する意見箱などを設ける
- ワッペン、ネーム問題で分会・支部役員がホーム等で組合員の激励行動を行う
- 組合員個々人を分会業務に自発的に参加させていく(ビラづくり等)
- タオルやシャツに要求を染め抜いて(または書いて)活用
- あらゆる私物に要求を書きこみ意思表示
- マイカーの後方窓に要求を書いた三角すい等をおく
- ワッペンやネームの着(不着用)を創意工夫して行動の統一をはかる
- 休憩時間等の「一〇〇三〇分間集会」を行う
- 年代別・職種別の学習会も取り組んでみる
- 点検などの「メモ活動」を継続していく
- 失業対策のためのいろいろな創意工夫
- 弾圧されている職場にちらしに代わる「激励キップ」をつくって改札等で渡す
- 職場ニュースをそれぞれが下車駅で手渡しミニ交流
- 「年賀状」や「暑中見舞」等で要求を出す

なお、以上の諸行動を「現認」して処分してくるなら正当防衛・緊急避難(は合法)的

な意味も含めて、「現認されない闘い」などが取り組まれている。安保・反合闘争などのときによくやった夜陰のステッカー貼りなども再現されつつある。さらに「小さな闘い」をあげれば、浜のまさごほどもある。

- ▽ ボール箱活用 ロッカーのステッカー張りがるさいなら、ロッカーの上棚にボール箱をおき、それに要求をかく。箱には学習誌を入れる。
- ▽ 移動用ステッカー ステッカー等を厚紙かガムテープで裏打ちし、ハリ金か磁石をもって取り外し容易にし、臨機に掲出。
- ▽ 見えない闘争 ステッカーなどを、職制の見えないしかし労働者だけが知っている所に張る。連絡事項やミニ「指(示)命」なども同じ。
- ▽ ポケット闘争 公私物でポケットから覗いた部分に要求を書く。点検手帳も同一活用。

▽ ミニ組合旗掲出 赤い紙があったら大中小を問わず組合旗に仕上げ、カベに張り出しTVアンテナ等に掲出。

▽ 点呼中闘争 たとえば分会三役は質問をし、執行委員長は抗議の発言。または助役が不当な言動をしたら分会長の「申し合せサイン」で全員が何らかの言動をする。

▽ ティッシュ闘争 各人の机の上におくティッシュ箱、ジュースカン、三角スイ、湯のみ、灰皿、たばこやマッチ、貯金箱、筆立……等に要求をかく。

▽ メタンガス闘争 便所へとくに職員▽のなかで、ピラや機関紙を張る。メタンガスの中で読むと浸透する説? あり。東京駅は二年ごしの闘い。京成一五六時間闘争時のWC内寄せ書? はすごかった。

▽ その他

□ 引き継ぎノート 業務日誌ふうに、分会活動の申し送り、警戒事項、要求等を書く込む。

□ 早期学習・交流会 夕方多忙だから。

□ カレンダー活用 カレンダーに書く。S 駅では「川柳」でめぐりカレンダーを備え付けた。通常カレンダーの裏に要求をかき、在室中にウラ返す。

□ 不満を形に残す 要求に、ピラに、行動に、とにかく何らかの形で表わす。かげ口やめて……。

これらの活動を、こまかい、とか、みみっちい、とか言うなかれ、みんな全国のそれぞれの職場で討議し、チエを出し合っの行動であり、*「小さな火花」*として温く見守り組織的に嘯んでいかなければならない。*「火花が焰となつて……」*こそ諸運動は成功する。

このような火花のような権利闘争・経済闘争で必ず思い出すのが、先哲の「…経済闘争は必然的に政治闘争に転化する」という命題である(「われわれの綱領」)。この命題は今まで殆んど紹介されていないが、*「経済闘争をつめていくと必ず政治権力が顔を出すし、それに突き当り、階級としての自覚をもちはじめ、政治意識へ発展し反権力の闘いをやるようになる」*という注釈もついている。「資本論」でもすでに、労働者は生産力発展の過程で結集させられ、組織的にきたえられ、ついに資本主義を叩く鐘を打ち鳴らす……と世界の労働者に目標を与えた。

国労も過去三四年間、賃金(仲裁)闘争の過程で、賃金——仲裁をつめていくと、政治

権力にぶち当るがゆえに、政治闘争を……と牽引してきたが根っこは同じ考えである。総評の階級的労働運動もこのような方向で構築され、歴史の歯車回しに一定の役割を果してきたが、その後の運動論・組織論においてつぎのような攻撃がはげしい。すなわち、先にあげたような職場を土台とした諸々の経済闘争・権利闘争などの職場闘争を叩くやり方として、「モノトリ主義」「職場闘争主義」「反合ばかり……」「企業内運動」「経済闘争主義」、またはその頭に「伝統的」「古典的」とかぶせたり、最近では「価値偏重」「手段主義」「取引主義」「ヤラセ闘争」など八ツ当り気味なものから、さらに「階級的モノトリ主義」という噴飯ものまででてきた。このように職場反合を叩く反動として「政治闘争」を主要に強調するのである。経営参加的？政治闘争を……。

しかし、体系的な闘いとして経済闘争を土台としての政治闘争は強靱なものとなり、歴史発展に寄与してきた。三池闘争をピークとする反合闘争を背景とした安保闘争が一大発展を遂げ、国労の「志免」や五万人反合を背景とする諸政治闘争は牽引車となった。各国における諸運動も同質の発展過程を辿ってきた。

国労の中の必然性

さて先哲の規定した「経済闘争から政治闘争への弁証法的発展」については、国労のなかでも「ヤミ・カラ」や「過員・婦休」の実質首切り反対のきびしい闘いを取り組んできたが、必ず、当局・資本・権力は抑圧・弾圧に出てきて、すでに「ヤミ・カラ」問題を中心には十六名の首切りと六万三、七九八人の停職等、また四、二六五人・一、三八一万五九二円の賃金カット処分を強行してきた。裁判等の係争事件も四八件（原被告のべ一、一九五人。合準備中。八四・二現在）となっている。そして賃金引き下げ、ボーナスカットなど絡め手締め上げである。（年約七万五、五九六円の損失）。そして赤字の責任も国鉄労働者のせいだとマスコミによって叩く。底流として三九万——三四万——二九万——二〇万人への首切り攻撃であり、そして「企業解散」（分割・民営化）である。先哲ならずとも労働者はいやでも応でも、一体赤字の真因は何だ、臨調・行革の本質は何だ、さらに戦後瀬戸際政策を強行してももうけを増大させようとしている黒幕は誰だ、どうして労働者はいつまでも苦しまなければならないのかなど、諸矛盾の根因をさぐり、考え、洞察するようにするのは必然ではないか。いわゆる「反面教師」である。いうところの政治意識・自覚の高まりが起き、政治闘争への「転化」へ発展していく。しかも日常的学習活動が活発ならなお相乗効果を起こそう。学習を強調するゆえんである。岩井さん流に言えば「いや応なく」階級意識が高まる、ということである。国労の歴史がそうであった。目的意識的に取り組めばなおいかに決っている。

ここで「情勢がきびしいから……」の「情勢」について、最近とくに動労などの豹変・右傾化を見きまするにつけ「情勢把握」は科学的でなければならぬことと痛感する。「情勢がきびしいから……」と、戦術をためることを通り越して、今までの「物の見方」や「戦略」まで変えつつあるすう勢にある。

思えば、資本主義の続くかぎり、情勢は労働者にとってはいつも悪くきびしい。基本的にはいつもきびしい。

広島を忘れるな！

「平和」の演説の背後で

人類は一九四五年四月二十五日を永久に記憶するだろう。この日、ベルリン包囲が完了し、第一ウクライナ方面軍の部隊がドイツ中央部で英米連合軍と合流した。同じ日にサンフランシスコで、平和と安全の維持のための包括国際機関の憲章を準備する連合国会議が開幕した。知る人ぞ知る、この遠い四月の日、国連憲章起草会議に出席した代表たちが平和愛好の美辞麗句をふんだんに盛り込んだトルーマン大統領の録音放送に耳を傾けていたその時に、当の大統領はホワイトハウスのオーバル・ルームで、スチムソン陸軍長官、グローブス准将と話し合っていた。

「あと四ヶ月すれば」とスチムソンが報告した。「人類史上最大の威力をもつ兵器の開発が九分通り完了します。この爆弾はたった一発で一つの都市全体をいっぺんに消しとばすことができます」

マンハッタン計画のキャプー——グローブス准将は、原爆開発の最終段階について大統領に詳しく説明した。二週間前に（ルーズベルト前大統領の死去に伴い）大統領に就任したばかりのトルーマンは、この話にびっくり仰天した。一か八かの大勝負で、思いもよらずエースの切札が舞い込んできたバクチ打ちのような気分になった。その後の行動方針ははっきりと決まった。まず米国が新兵器の唯一の保有国になったことを見せつけ、続いてこれをネタにソ連を恐喝するのだ。

こうして原子兵器開発の秘密レースは、ゴール前の直線コースに入った。このレースがどのように始まり、一九四五年八月にどんな悲劇的な結果をもたらしたかを物語っているのが、フェボルド・オフチニコフの新著「熱い灰」である。（ノーボスチ通信社出版局、一九八四年。その抜粋は在日ソ連大使館広報部発行「今日のソ連邦」誌一四一—一六号に連載）

ナチの「ウラン・プロジェクト」は失敗

一九三〇年末にフランス、米国、ドイツ、イギリスで物理学者はほとんど同時に、一定の条件下で巨大な破壊力をもつ爆発を伴う核連鎖反応をひきおこすことができるとの結論に到達した。すでに戦争の初期にドイツ軍首脳部は原子核研究に関心を示した。一九三九年九月に陸軍兵器装備局でドイツの主だった物理学者を集めて会議が開かれ、「ウラン協会」が創設され、その活動計画が作成された。こうしてナチ政府は「ウラン・プロジェクト」を承認した。

核分裂研究は、フランスでも、やや遅れてイギリスでも、始まった。ここにはヒトラーの手ののがれた多くの欧州の物理学者が集まっていた。ロンドンはその研究成果を米国にも伝えた。まもなく、ドイツ軍の空襲や偵察飛行が行なわれている状況下のイギリスで核研究を工業的規模で展開するのは不可能だということがはっきりしたので、研究は大西洋

の向こう岸に移された。両国が協力して原子爆弾を開発することに決まった。しかしペンタゴンの手中に握られた原子力研究は、米国のきわめてきびしいコントロール下に置かれ、イギリスの計画は実質上マンハッタン計画に吸収されてしまった。二〇億ドルが割り当てられ、一五万人が動員され、最大クラス工業コンツェルンが引き入れられた。すべてが厳重に秘匿された。

ナチの「ウラン・プロジェクト」は、ついに原爆を開発するまでにはいたらなかった。その主要な理由は、電撃戦の失敗とスターリングラード以後の戦局の根本的転換であったとオフチンニコフは書いている。最初はナチ首脳部は原爆なしでも勝利を収められると期待していた。一九四二年以後には、もはや手遅れであった。ファシスト軍事機構のあらゆる努力は、武器弾薬の補給という目先の課題に集中された。ソ連軍の強力な打撃が、ヒトラー一派の原子兵器開発を妨げたのである。

科学者たちは核兵器に疑念

その間にもマンハッタン計画はフルスピードで進行していた。たしかに、ソ連軍がファシストの野獣に次から次へと致命傷を負わせていた一九四四年後半になると、多くの米科学者は原子兵器使用の必要性に疑念を抱くようになった。最初にニールク・ボアが、続いてアインシュタインとシラードが強く反対した。だがペンタゴンは彼らの意見を無視した。一九四四年にペンタゴンは特殊任務の学術情報隊、いわゆるアルソス・ミッションを創立した。軍と共に進撃しながら「ウラン・プロジェクト」の資料を集め、著名な学者を探し出して米國に送るのが、その任務だった。そうした学者の一人となったのが、のちに多段弾道ミサイルの開発で主役を演じたナチ親衛隊少佐ヴェルナー・フォン・ブラウンであった。新しい種類の兵器——巡航ミサイルを開発したのも元ナチ軍大將のワルター・ドルンベルガーである。

「本今朝手術をおこなった」

一九四五年六月一六日——ポツダム会談開幕の前日——の夜、ベルリンのトルーマンあてに至急電報が届いた。「本今朝手術を行なった。完全な診断はまだ下せないが、結果は満足すべきもので、予想を上回っている」。この日のアラモゴードで最初の核爆発実験が行なわれたのである。八月六日と九日に、軍事的必要は全くないのに、原爆は広島と長崎を焼きつくした。

目撃者の証言を引用しながら、オフチンニコフは被爆後の両都市の様子を記述している。今日のわれわれは、この恐るべき兵器を手に入れたペンタゴンが、一度ならず世界を破局の瀬戸際に立たせたことを知っている。しかし米国の原子兵器独占は長くは続かなかつた。

一九四五年八月六日、広島島の橋の一つを九人が渡っていた。彼らが炎天下をどこへ急いでいたかは、永久にわからない。その名前も永久にわからない。これらの人々は焼きつくされ、蒸発し、空中に消失してしまった。死の閃光が彼らの影を橋の石畳の上に焼きつけただけであった。今日、この橋からほど遠からぬところに平和公園がつくられている。この公園の慰霊碑には「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」という文字が刻まれている。人類はそれを信じている。